著者・まえがき（*Chapter1 ～ 3*）

女性医師は，医師としてバリバリ働きながら，家に帰ったら家事と育児もこなす，「スーパーウーマン」でないと務まらないと思っていませんか？　もしくは，家事・育児全てを祖父母に任せて仕事だけに没頭するか，一時的にでもキャリアを中断して「女性らしく」家のことに集中する，その2つしか選択肢がないと思っていませんか？

この本の著者4人は，スーパーウーマンでもないし，この2択から思い切って1つだけを選んだわけでもない，普通の女性たちです．診療科も，住む地域も，パートナーや子どもの有無もさまざまな4人．ただ共通しているのは，皆立派に医師として働き，その仕事にやりがい，生きがいを感じて楽しく生きていることです．人生の岐路に立った際に，女性としての悩みにぶつかるのは皆同じで，その時どきで進路を模索して，ここまで歩んできました．

今，やっと日本でも多様性の受容が求められる時代となってきました．女性医師の働き方やプライベートライフにもさまざまなスタイルがあってよいと思うのです．大事なことは，人の目を気にしたり環境に合わせたりして「自分にできることをやる」のではなく，「自分が本当にやりたいことをやる」こと．本書が，読者の皆さんがそれぞれのやり方で，やりたいと思えることを実現する手助けになればいいなと思っています．

最後に，本書の企画に声をかけてくださった反田篤志先生，お世話になりました丸善出版企画編集部の程田靖弘さん，執筆の方向性に困ったときに男性医師からみた女医の存在などヒントとなる意見をくれた夫に，心より感謝いたします．

2020年8月吉日

セントルイス大学腎臓内科
共　著　宮田 加菜

著者・まえがき（*Chapter4 ～ 6*）

最近，医師の「働き方改革」が謳われていますが，日本でもアメリカでも女性医師の働き方が医師全体の働き方に多大な影響を与えることはいうまでもないと思います．医師の働き方如何で，キャリアもプライベートも充実し「ハッピー」でいられる，そして皆がそうだと互いに気持ちよく助け合いができ，医療提供の質も上がる，何でも好循環となることができます．

時代は目まぐるしく変化しており，女性の社会進出や活躍の場のグローバル化も進みつつあります．アメリカはもちろん文化や社会が全く違うので単純比較をするべきではないと思いますが，個人的には日本で8年間，アメリカで約10年間，臨床を経験してきて，日本でも取り入れられる考え方やアイディアが結構あるのではないかなと思っています．異なる考え方や価値観に触れることで社会の関心を高めることができれば，「良い変化への第一歩」に繋がると思います．この本が女性，男性を問わず，若手医師の皆様の今後のキャリアや家庭の考え方，意識の刺激になればうれしいです．また，少しでも時代に沿った日本の医師全体の就業環境改善の参考になればと思います．

私はたまたま幸運が重なって，現在のポジションにいることができています．医師8年目頃まではキャリアも人生も迷いが多く，「自由人」という名の迷い浪人でしたが，やっと落ち着いた今，こうやって皆様に自分の私見や経験談を共有させていただけるようになり，感謝の気持ちでいっぱいです．この場を借りて家族や友達，同僚，女性の社会活躍の道を切り開いてくれた先輩たち，執筆の機会を下さった反田先生と丸善出版の皆様に御礼を申し上げたいと思います．

2020年8月吉日

エモリー大学救急部 / メトロ・アトランタ救急搬送サービス
共　著　中嶋 優子

著者・まえがき（*Chapter7 ～ 10*）

私は恵まれたことに，今まで女医だということをあまり意識することなく医師として働いてきましたが，それには周りの家族，同僚，そして友達に恵まれてきたことが大きな要素なのだと思っています．そんな私にも，自分のキャリアを循環器インターベンションというアメリカでは競争の厳しい専門に決めた過程には，2 人の女医さんとの出会いがありました．

1 人はスラリと背の高い心不全を専門とするドクター K，ショートカットの金髪でいつもパンツスーツ，ハキハキと議論をする姿はとてもかっこよかったものです．彼女は今，ニューヨークの大きな病院の Chief Medical Officer（医師最高責任者）として活躍しています．もう 1 人は，今も先輩であり友達でもあるデイピカです．彼女はインド出身，小柄でいつも陽気にジョークをいって周りを笑わせていますが，臨床能力は抜群で，私がレジデントのときにインターベンションの指導医となり，CCU ではレジデントたちと教育回診を行い，妊娠中にもプロテクターを着て心臓カテーテルをしていました．女性ながら心カテを専門にし，家庭と両立して頑張っている姿には「女でもできるんだ」と大いに励まされ，彼女の存在なしでは，今の専門は選んでいなかったのではないかと思います．

先達はあらまほしきことなり．この本が，頑張る女医さんのキャリアパスを選ぶのに参考になることを願っています．今回の執筆は，今までなんとなく思っていたことを改めて考えるよい機会となりました．話を聞かせてもらったり，エピソードを使わせてもらった同僚たちに感謝するとともに，世界の女医さんたちのさらなるご活躍と幸せを祈っております．そして今回執筆の機会を下さった反田先生と，お世話になりました編集部の方々にお礼を申し上げたいと思います．

2020 年 8 月吉日

マウントサイナイ・ベス・イスラエル病院循環器インターベンション
共　著　兼井 由美子

著者・まえがき（*Chapter11 ～ 14*）

あるところに，あめいろぐ共和国がありました．そこでは医者が少なく，いつでも呼び出しに対応しなくてはなりません．女子高生のカーリーちゃん（仮名）は医学部を目指そうか悩んでいました．なぜなら，天然パーマの受験生は入試で 2 割減点されるからです．これは呼び出しがあったときにシャワーを浴びていた場合，パーマは乾きにくいことを保健省が問題視したからでした．カーリーちゃんは，ひどい天然パーマなのでした（注．フィクションです）．

医者に求められることとは，何でしょう．手術の腕がよいことでしょうか．知識が豊富であることでしょうか．それとも．病める人たちの心に寄り添えることでしょうか．おそらくこれらの素質を異なる比重で掛け合わせたコンビネーションに，それぞれの状況における正解があるのでしょう．これらの素質に，性別は関係ありません．それに男女のくくりだけで議論する問題でもありません．LGBTQ の立派な先生方を何人も存じております．

「女医」という言葉を，例えば，天然パーマ医師に置き換えてみてください．天然パーマに生まれてくるかどうか，本人には選べません．医者の素質と関係あるとも思えません．確かに髪が乾くのに時間がかかるかもしれませんが，それなら天然パーマの受験生に足枷をするのではなく，そもそも毎日 24 時間 365 日の呼び出し体制を見直すべきでしょう．性別とはもって生まれた属性で，それを軸に職業の適性を論じることは，髪質や肌の色を使って論じるのと，本質的には変わらないことなんです．

本当に才能ある者を，その属性にかかわらず活かすことのできる環境にこそ成熟した社会があるのだと，信じております．皆さんも一緒に女医問題を考えてみませんか．

2020 年 8 月吉日

カルマノスがん研究所 / ウェイン州立大学血液腫瘍内科
共　著　長阪 美沙子